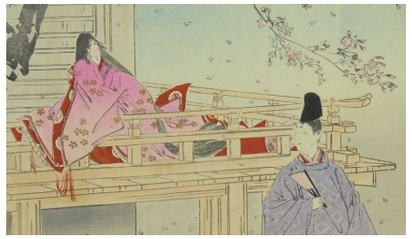
源氏絵素人談義―月耕『源氏五十四帖』の典拠―　平成丁酉夾鐘下浣

Ⅰ　見所

↑『俤源氏五十四帖』
二代広重（一八二六―一八六九、扇面絵）・二代国貞（一八二三―一八八〇、人物画）の合作
＊地に青海波、扇面には骨の型押し

○絵師の腕
新時代の評価に堪える写実性・的確な描写力
歴史的考証（衣装・建築・調度・庭など）
的確な空間把握（遠近法・風景画として構成）
＊岩切信一郎「尾形月耕―明治十年代から二十年代の活動を中心に―」（『浮世絵芸術』一四四）

○印刷の技
ぼかし（ほぼ全ての巻に実施）
型押し（色紙形・几帳・雪景色）
艶墨（漆塗りの調度品）
胡粉刷り（顔・雪・衣装）



↑花宴の拡大（胡粉＋紅のぼかし）
顔に胡粉を載せ、紅で目の周りを彩色＝微醺を帯びた光源氏

胡粉刷り（顔・襟元・表衣の一部）
＊蜘蛛の巣文様を二色とし、表衣に変化
↓表衣と黒の線を先に刷る＋胡粉の重ね刷り＋更に濃い茶色の文様

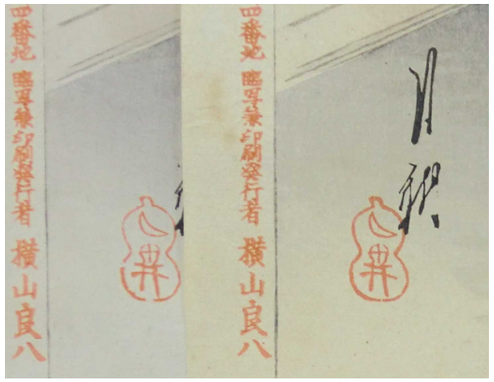
Ⅱ　『源氏五十四帖』の刊行年と問題点

０総外題　明治二八年（一八九五）四月
＊欄外の刊記
「明治二十八年四月　日印刷　仝月　日発行（以下二行に刻す）東京市日本橋区馬喰町一丁目四番地／画作印刷兼発行者横山良八」

１桐壺　明治二五年（一八九二）
＊「明治二十五年　月　日印刷出版　下谷区スキヤ町十二バンチ　印刷兼発行者　横山良八」

◎刊行の順序
イ１桐壺～２９行幸・３１槙柱・３３藤裏葉・３８鈴虫＝明治二五年
＊３空蝉（明治二五年二月）、１２須磨・１５蓬生・２１朝顔（明治二五年八月）
ロ３０藤袴・３２梅枝・３４若菜上～３７横笛・３９夕霧～４７総角＝明治二六年
＊３０藤袴・３２梅枝・３９夕霧・４０御法・４２匂宮・４３紅梅（明治二六年一〇月）

４４竹河～４７総角（明治二六年一二月）
４０御法・４２匂宮・４３紅梅は「明治廿六年十月廿日印刷仝十一月　日発行」と詳しい
ハ４８早蕨～５０東屋・５２蜻蛉＝明治二七年九月
ニ５１浮舟～５４夢浮橋・０総外題＝明治二八年
＊総外題のみ「四月」と刻す
↓１　刊行は巻の順ではない（定期的な刊行でもない＝明治二六年は集中的に刊行）
２　刊行者は全て横山良八（彫り師名「円活」＝野口円活が２１朝顔まで散見）
３　イすなわち３８鈴虫まで「下谷区スキヤ町十二バンチ」、ロ・ハ・ニは「東京市日本橋区馬喰町一丁目四番地」
４　巻名・巻の順序の不備
若菜上・下を区別しない（総外題、本体では区別）
１３澪標と１４明石、２０乙女・２１朝顔は順序が逆（総外題は正しい）
＊＊版木の修正・欠け（後刷り）
４８早蕨巻の落款に欠損が見られる（左図）
料紙にも差あり（左は薄く雲母を引く）→明治二八年以降の刷りまし分か（刊記は明治二七年）



○修正は外題部分
２０乙女の外題「二十」の下に埋木して「一」を加える
↓２１朝顔と順序が逆であるところを訂正したか
３１槙柱の外題「卅壱」の「壱」は何かを擦り消しして押捺（活字による修正か）

◎絵柄・色紙形に関する疑問
１　２５螢の不自然さ（屋外に飛ぶ螢・２２玉鬘の衣配りと思われる構図）
２　３５若菜下は若菜上に相当する絵
３　３３藤裏葉・３５若菜下の色紙形は引き歌（他の巻は代表歌）

Ⅲ　月耕の時代に参考となり得た資料
イ　絵入源氏物語
慶安三年（一六五〇）跋・承応三年（一六五四）刊→万治三年（一六六〇）刊横本・　小型絵入本
＊大和絵風、二二六図（典拠とする作例は、写本・版本ともに多い）
ロ　源氏小鏡
明暦三年（一六五七）安田十兵衛版・寛文六年（一六六六）無刊記小本・延宝三年（一六七五）鶴屋版・文林堂須原屋版が絵入本
＊古活字版（嵯峨本以下七種）・本文のみの整版（慶安四年秋田屋版以下三種）
吉田幸一『絵入本源氏物語考』上は一八種を掲出
＊＊寛文版以下は、明暦三年安田十兵衛版・絵入源氏および十帖源氏を基本素材として構成
＊＊＊原則として一巻一図

ハ　十帖源氏・をさな源氏

十帖源氏＝野々口（雛屋）立圃（一五九五～一六六七）の啓蒙的著述、本文の要約と絵（自作）

一三一図、万治四年（寛文元年、一六六一）初出か

をさな源氏＝十帖源氏を簡略化、一二〇図（上方版）・六四図（江戸版）、寛文六年（一六六六）

刊その他

＊十帖源氏を調査対象とする

ニ　雛源氏

不自然な点が一致＝３５若菜下は若菜上に相当する絵・３３藤裏葉と３５若菜下の色紙形は引き歌

雛源氏（合羽刷り）

「若菜下／夕やみは道たと〳〵し月まちてかへれ我せこそのまにも見ん」

絵は若菜上のよく知られた六条院蹴鞠の場面

＊墨刷り版・合羽刷り版あり、墨刷り版が先行、さらに未報告の一本をそれ以前に想定

（参考）愚文「二つの雛源氏」（『むらさき』五三）

＊＊それほど伝本は多くない→雛源氏と同様の内容を持つ典籍の流布が推測される

ホ　源氏五十四帖絵尽

文化九年（一八一二）撰者不明の豆本、巻の代表歌と絵のみ

＊書肆はへと同じく甘泉堂和泉屋市兵衛

ヘ　源氏物語絵尽大意抄

天保八年（一八二七）序・渓斎英泉（一七九一～一八四八）画、頭注は啓蒙的記事と学術的抜粋

絵はホ源氏五十四帖絵尽を継承、かなり詳しい頭注を加え、原拠の素朴な描き方を精緻に変容させる

＊小町谷照彦『絵とあらすじで読む源氏物語』

ト　その他

百人一首版本の頭注など

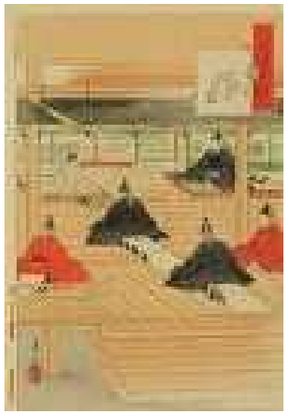
◎イ・ホまたはへを基軸とする画面構成、稀にハを使用する

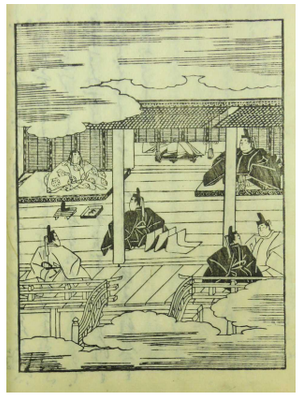
典拠不明の巻は、月耕の創意か

Ⅲ　粉本からの離陸

○忠実な継承

◆　１桐壺（イ絵入源氏物語）





視点を右側に変更、基本的な構図は同じ。人物の数・位置・装束（白を朱とする）・冠などを継承する。←桐壺帝を御簾の奥に移動・遠近法による自然な空間構成・色彩（墨版から多彩へ）

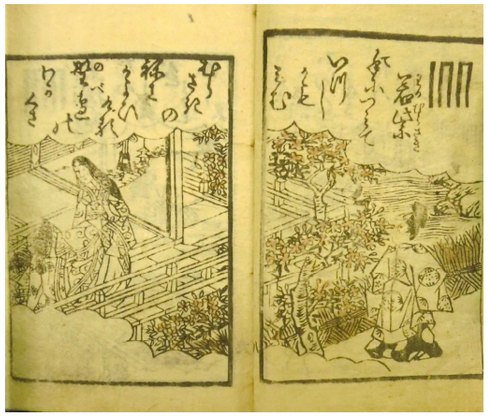
＊絵入源氏物語は、桐壺更衣の参内・野分立つ夕暮れの弔問・長恨歌絵・鴻臚館・光源氏元服の五図、

源氏小鏡は鴻臚館、十帖源氏は鴻臚館・光源氏元服、雛源氏以下は鴻臚館のみ→十帖源氏の光源氏元服は構図に差がある

＊＊絵入源氏物語を粉本とした巻（九図）

２帚木・７紅葉賀・１０賢木・１４明石・３１槙柱・３４若菜上・３６柏木・３９夕霧・４８早蕨

◆　５若紫（ホ源氏五十四帖絵尽・へ源氏物語絵尽大意抄）



ホを掲出

若紫巻では、幼い紫上と女房、雀の子を描くのが通例。月耕の絵はかなり近くからの垣間見であり、珍しい。典拠はホかへ。人物・建物と小柴垣・中央の桜が共通する。ただし若紫巻に雀は欠かせないと考えたらしく、色紙形の脇に登場させている。

＊ホまたはへに基づく巻（一四図）

３空蟬・４夕顔・５若紫・１２須磨・１５蓬生・１６関屋・１７絵合・２５螢・３０藤袴・３５若菜下・３７横笛・４２匂宮・４３紅梅・５２蜻蛉

＊＊イ・ホまたはへと共通要素が多く、いずれとも判断し難い巻（一七図）

６末摘花・１３澪標・１８松風・２２玉鬘・２３初音・２９行幸・３２梅枝・３３藤裏葉・３８鈴虫・４０御法・４１幻・４４竹河・４５橋姫・４６椎本・４９宿木・５３手習・５４夢浮橋

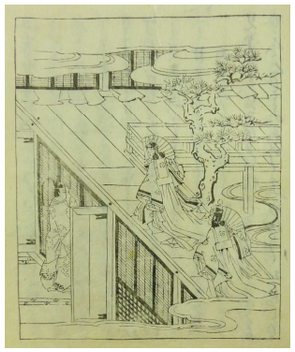
◆　その他

１１花散里（十帖源氏）

他の絵入り本にない構図。手前右下に花散里、奥の妻戸の前に光源氏。構図・几帳・垣根等は共通、花散里の位置としぐさを変える。加えて、新時代の鑑賞に堪える空間把握。

○依拠資料の加工・展開

構図の左右反転（視点移動）・一部切り抜きと拡大・典拠の組み合わせ



十帖源氏

他の絵入り本では、宮中の舞姫（四、五人）と冠・袍の夕霧を描く。十帖源氏の視点を左右逆として、建物の外から眺める構図。夕霧は御簾の奥に立ち、影絵として描かれる。烏帽子を着用しているので、内裏ではない。六条院の舞習わしを想定したか。

○典拠の見当たらない巻

８花宴・２７篝火・２８野分・４７総角・５０東屋